アナログ画を用いたイメージ分析の試み

徳島大学工業短期大学部　正 ○ 山中　英生
徳島大学工業短期大学部　正　　水口　裕之
応　用　地　質　㈱　正　　高野　政志

1．はじめに

景観計画においては、課題となる地域の現状や望ましいイメージを把握して、代替案を作成し、これをもとに関係者が評価するといった手順が一般的になりつつある。このとき、地域や計画施設に望まれるイメージは、言語を通じて表現されることが多い。例えば、「個性的な」「歴史的な」「落ち着いた」、「活気のある」といった言葉がまさしくそれである。景観計画の代替案は、この言語イメージを地物の「形」、「色彩」、「配置」といった視覚的イメージへと具体化したものであることが望まれるわけである。

従来、こうした景観デザインへの工学的、計量的アプローチとしては、既存景観やモンタージュを用いて画面構成と心理量の関連を分析するという手法が多く用いられてきた。この方法は、作成したい施設の形状や色彩などと心理量との関連把握が可能で設計案選択に結びつけやすいが、それだけ誘導的な要素も強く、提示する画像の品質や選択に左右される面が大きいという問題もある。そこで、ここでは、言語に対する人間のより直接的な「視覚イメージ」をアナログ画を用いて分析することを試みてみた。

2．アナログ画実験の概要

1)アナログ画とは

アナログ画はＢ・エドワーズが彼の著書[1)]の中で美術教育方法の一つとして紹介しているもので、一つの言葉の「視覚的イメージ」を意味のない鉛筆画として描くという実験である。例えば、図１は今回「静寂な街」というアナログ画を学生に書かせた結果の一部であるが、「静寂」を表わす視覚イメージとして、横に延びた直線が共通していることがわかる。こうした共通性の存在、さらには言語と画の先史的発展経緯からみて、こうした視覚的イメージが言語としての性格を持つことが指摘されている。

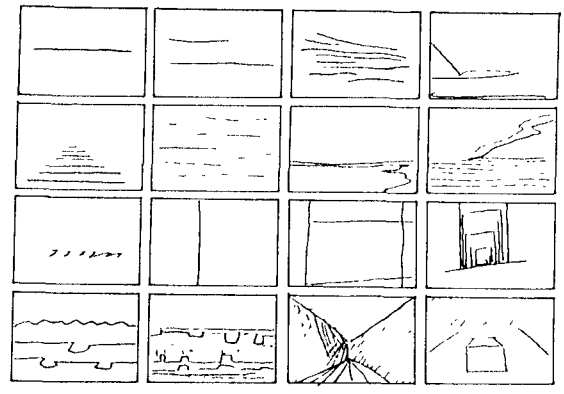

図１　アナログ画の例　「静寂な街」

そこで本研究では、「街」を表す言語イメージをもとにして、そこから生まれる視覚イメージをアナログ画実験で見いだすことを試みた。この関連を把握することで、言葉によるコンセプトイメージを具体化する段階で、その作業指針を提供しえると考えたからである。

表１　アナログ画実験に用いた形容詞

躍動の	－	静寂な
親しみのある	－	高級な
未来の	－	古風の
憩いの	－	活動の
男性的な	－	女性的な
人工的な	－	自然の

2)実験の概要

今回は街のイメージを表わす表１の６対１２個の形容詞を選んだ。これらは従来の研究で、ＳＤ法のイメージ分析で用いられている形容詞対を参考に抽出したものである。実験では、この12形容詞を一つずつ提示して、横約10cm縦７cmの枠に「街」のイメージを表わす鉛筆画を描くように指示した。被験者は総数32名で、うち22名は美術部の学生、他は一般の学生で、一つのアナログ画を描くのに与えた時間は約５分である。

3　アナログ画の特性分析

1)形状要素の出現頻度

アナログ画に描かれている形状要素を15種類に分類し、各言語イメージに対する32人分のアナログ画で、要素別の出現数を示したのが図２である。女性的な・憩いの・親しみのある・自然なイメージは曲線系、逆に高級な・男性的な・静寂の・人工的な・さらに古風なといったイメージは直線系が多く、活．動の・未来の・躍動のは直線と曲線が混在していることがわかる。特徴的なのは静寂と女性的の２つで、静寂は縦線・横線、女性的は自由曲線・円・波線に特化し、それ以外の要素の出現がきわめて少ないことがわかる。

2)画面構成の特徴

次に、アナログ画の画面構成の指標として、曲線度（曲線と直線の割合）、形状数（異なる形状の種類数）、頻度（同形状の最大繰り返し数）、密集度（描かれている形状要素の間隔）、占有領域（空白部分の割合）の５つを取り上げ、これらの側面から分析した。図３は、全てのアナログ画について各々の画面構成の指標を大、中、小の３段階で採点し、それをリッカート評点総和法で言語イメージ別に集計したものである。

この図でわかるように、形容詞対によるアナログ画の特徴の相違は、先に指摘したように曲線度に顕著に表れており、この違いで図のように３つのグループに分かれている。形状数の特性で見ると、静寂なイメージで少ないことが特徴的である。繰り返しの多いのは、躍動の・古風なといったイメージで、また、高密集度の特徴をもつアナログ画は、人工的なイメージに多いことがわかる。占有領域は全体に高いものが多いが、中でも古風なというイメージがきわだって高くなっていることがわかる。

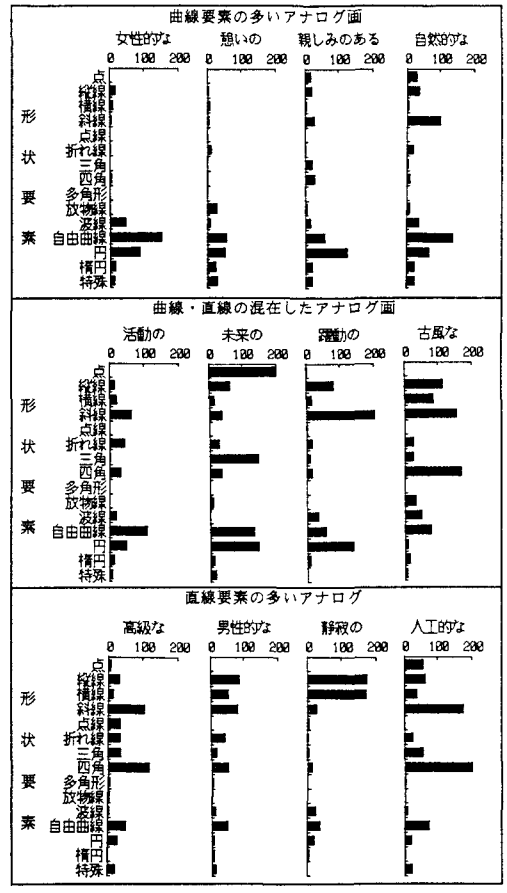

図２　アナログ画の形状要素出現頻度

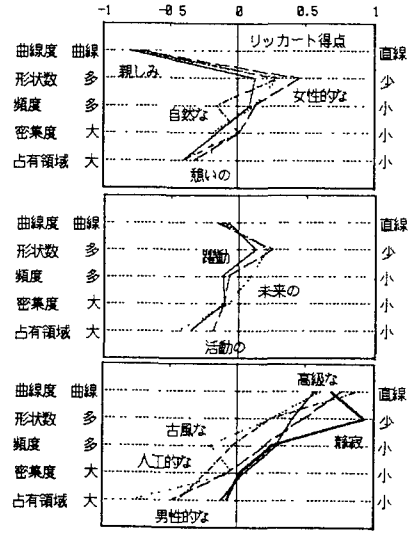

図３　アナログ画の画面構成の特徴

4．おわりに

アナログ画の分析によって、言語イメージと関連する視覚イメージの特徴が見いだせることがわかった。これをうまく使えば、景観計画の代替案作成段階で、コンセプトイメージに対応した形状選択の一助にできると考えられる。実際、筆者らは徳島駅前の歩行者デッキのデザイン指針作成に応用を試みているが、その詳細は他の機会に譲ることにする。ただし、今後の課題としては、こうした仮想的実験による指針と、代替案評価や既存景観分析での成果との整合性の検討が必要であろう。

参考文献 1)B·Edwards,北村孝一訳:内なる画家の眼,
エルテ出版,pp.50-65、1988